

近代市民社会の奴隷的性格について

正慶 孝*

新しい社会の誕生

「古い体制」(アンシャン・レジーム)が崩壊したのち成立した「新しい社会」が、政治的には十七世紀の英国におけるピューリタン革命や名誉革命、および十八世紀におけるアメリカ合衆国の英国からの独立やフランス大革命、経済的には英国の産業革命に始まり、経済学的には「資本家的生産様式」の社会あるいは政治学的・社会学的には「近代市民社会」とよばれる社会であることについては、異論は存しないであろう。

経済活動における自由放任の主張やフランス大革命における人権宣言は、個人の自由な活動や基本的人権を保証するとともに、その結果責任もまた自己が負うことを宣明したものであった。ここに個人主義が成立し、「身分から契約へ」(メーン)あるいは「ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ」(テンニース)ウェイトが移行した近代市民社会が成立

した。

アメリカ合衆国の独立宣言やフランス大革命の人権宣言は、その後の市民革命の人権宣言のモデルになったばかりでなく、たとえば日本国憲法にも大幅にとりいれられており、基本的人権の基盤を提供していることはよく知られているとおりである。また、「資本家的生産様式」すなわち近代資本主義の経済運営は、近代化におくられて出発した諸国のモデルとなった。明治初期の「殖産興業」あるいは「富国強兵」のスローガンは、レートカマーであった日本の近代化の方向性を要約的に示している。「殖産興業」あるいは「富国強兵」は、近代的な産業を保護・育成するとともに強い軍隊をつくって他国の帝国主義的な侵略や抑圧から自国を守るための政策を簡潔に表現したものであり、それを実現するためには、経済的資源を一元的に集中させ管理し配分する組織、中央集権的な政府が必要である。日本における国家主導の工業化と近代化がこうしてはじまったのである。

ロシア革命の指導者であるウラジミール・イリッチ・ウリヤノフ(レーニン)は、資本主義発展の二つの道を提示した。一方はプロイセン型であり、他方は英米型である。プロイセン型は「上からの改革」による、英米型は「下からの改革」による経済発展の道である。日本の資本主義発展の道程は、いうまでもなく、プロイセン型のそれであった。そのため、その強引な経済運営からさまざまな矛盾や対立が生まれることは避けられなかった。

F・テンニースによると、「ゲマインシャフトは持続的な真実の共同生活であり、ゲゼルシャフトは一時的な外見上の共同生活にすぎない。だから、ゲマインシャフトそのものは生きた有機体として、ゲゼルシャフトは機械的な集合体・人工物として、理解されるべきである。」⁽¹⁾という。

近代化は、ゲマインシャフトを破壊し、ゲゼルシャフトを創出していった。このように、政治における「創造的破壊の諸過程」が古い封建制社会から離陸して、近代社会をつくるためのコストであった。カール・マルクスのいう近代市民社会(Bürgerliche Gesellschaft)は、まさしくゲゼルシャフトの典型例であった。「魔術からの解放」(マックス・ヴェーバー)によってはじまった近代は、自由な発想にもとづいて行動する市民の誕生を前提としている。これは市民が「魔術からの解放」だけではなく、同時にゲマインシャフトのままさまざまな因習からも解放されていることを意味している。近代市民革命は、古い体制のいっさいの呪術、妖術、魔術からの解放とともに、封建制イデオロギーにもとづくいっさいの因習からの解放もめざしていた。

新しい社会とは、制度や組織上の変化ばかりではなく、歴史意識の面での革命的な変化にももとづいている。それは歴史が時間の経過とともに、進歩するという観念とも結びついてきた。フランス革命後の権力闘争に破れ非業の死を遂げたマルキ・ド・コンドルセ(一七四三—一七九四)の『人間精神の進歩に関する歴史的展望の素描』は、チュルゴー(一七二七—一八一)の「歴史は一直線に進み、歴史の各段階は、以前の各段階よりも進歩している。」という考えとともに、進歩思想を明確に表現したものだといわれている。このことに関し、コンドルセは、次のようにのべている。

最後に一つの新しい理論が発展してきて、それが、すでに僻見でぐらついていた建物に最後の打撃を與えねばならぬようになって来た。その理論とは人類の無限の可能性についてのそれであり、テュルゴ、プライスおよびプリーストリらは、この理論の第一の、かつもっとも有名な使徒であった。⁽²⁾

人類の無限の可能性についての信念が、チュルゴーやコンドルセの進歩思想の根底にある信念であった。この信念から、コンドルセは、アメリカ革命を高く評価して、つぎのようにのべている。

イギリス政府は、イギリス民族の従順な代表者たちに、アメリカの権利を侵害し、アメリカをして不本意な課税に服従させるよう命令したのである。そこでアメリカは、このような不正が両者の紐帯を切断したと公表し、その独立を宣言したのである。

すべての鉄鎖から解放された偉大な民族が平和裡に、自己の幸福のためにも適すると信じた憲法や法律を、自らの手で制定したのはこのときが最初なのである。そしてこの偉大な民族は、その地理的位置や旧来の政治状態から、一つの連邦共和国を樹立するに至った。⁽³⁾

ここでいう不本意な課税とはアメリカ独立戦争の切っ掛けとなった茶税等のことであることはいうまでもないであろう。アメリカ独立戦争のさなかに出された「独立宣言」は、自由に流布された文書のうちに「人権は高らかに支持せられ、何ら制限も留保もなしに詳述された⁽⁴⁾」と、コンドルセは高く評価している。トーマス・ジェファソンによって起草されたというこの独立宣言のなかにある「人間はひとしく生まれ、幸福を追求する権利がある。」という思想は、今日の日本憲法にも採り入れられている。たとえば、憲法第十三条には、「すべての国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については……最大の尊重を必要とする」とある。その前半の「人間は等しく生まれている……」という条項は、福沢諭吉の『学問のすゝめ』の冒頭の文句の「天は人の上に人をつくらず人の下に人をつくらずといへ

り。」という文句となつて、明治の青少年に甚大な影響をあたえたことはよく知られた事実である。

「新しい社会」は、フランス大革命やアメリカ革命によって、人間がふたたび発見され自由で平等な社会、同時に自己責任と自力更生を原則とする自由競争の社会である。

工業社会の誕生

新しい社会は、政治学的・社会的な側面では近代市民社会とよばれ、経済学的には資本家的生産様式によって営まれている社会である。これを産業の発展段階からみると、商人資本の重商主義から産業資本の自由主義に転換した時代に産業革命が起こり、産業革命によって工業前社会 (Pre-industrial Society) から工業社会 (Industrial Society) へ転換した。同時に、市民革命も勃発して、「新しい社会」が成立した。産業革命には、広狭両様の意味がある。「農業を基礎とする経済秩序から工業を基礎とする経済秩序、または工業がきわめて重要な一要素としての役割を演ずる経済秩序への、比較的急速な進展過程が、広義の産業革命⁵⁾」(小松芳喬『産業革命史』再訂版、一橋書店、昭和三十一年)である。このように、農業を基礎とする経済秩序が工業前社会であり、工業がきわめて重要な一要素としての役割を演じているのが工業社会である。『最初の工業国家』(マサイアス)である英国は、十八世紀初頭にあつては経済的基礎は農業であつたが、「十九世紀末葉になると工業に変化した。人口は飛躍的に膨脹した。生産設備も飛躍的に増加した。生活水準も飛躍的に上昇した。」のである(前掲書)。ダニエル・ベルは、『工業後社会の到来』のなかで経済・技術の側面からみた経済発展段階を、工業前社会、工業社会へと転換し、現在は科学・産業革命によって、

工業後社会 (Post-industrial Society) へと転換していると、指摘している。そして、工業後社会においては、財貨生産から情報・サービスの生産へ生産のウェイトが移行し職業分布も専門職や技術職が優位にたつ社会になっていく、とベルはいう。ポール・スウィージーの「科学・産業革命」、ズビクニュー・ブレゼンスキイの『電子技術時代』(テクネット ロニック・エラ)あるいはアルビン・トフラーの『第三の波』の主張も、同工異曲の主張である。

工業社会は、産業革命の遂行のなかで形成されていった産業社会である。この工業社会は、財貨の生産が中心で生産手段のうちもっとも希少な資源である資本が主導権を握り、資本のもとに人間労働が従属するという「資本主義社会」(マルクス流にいうと、資本家的生産様式)である。「テクノポリタン」(技術至上主義者)のひとりアルビン・トフラーによると、それは「第二の波」の時代ということとなる。その社会の技術の特徴として、アルビン・トフラーはつぎの六つをあげている⁶⁾。

- (1) 標準化 (standardization)
- (2) 専門化 (specialization)
- (3) 同時化 (synchronization)
- (4) 集中化 (concentration)
- (5) 極大化 (maximization)
- (6) 集権化 (centralization)

以上六つの条件は、大量生産に必要な条件である。大量生産と分業の徹底化、そしてそれを管理することが、工業社会(トフラーの用語でいうと、第二の波)の特徴である。

この第二の波の時代の技術の特徴は、近代の軍隊とカトリック教会の

僧院の特徴と酷似していることに気づくであろう。軍隊や修道院の行動原理から借りた画一化され規格化され命令一下のもとに整然と活動する組織形態が、現代の産業社会の組織の特徴ともなっている。

このような工業社会のスキームは、経済学創設の当初から存在していた。アダム・スミスの分業論がそうである。スミスは、(1) 製造工程上の分業(有名なピン工場の例)、(2) 社会的分業(職業の細分化)、(3) 農業と工業・商業との間の分業、(4) 都市と農村とのあいだの分業、を視野に入れて分業論を展開した。

スミスがこのような分業論を展開したのは、分業には(1) 同じことを毎日反復して行なっている、その仕事に習熟し技巧が増進すること、(2) 工程から工程へ移動する時間が省けるために時間の節約になること、(3) 同じ仕事をやっているためにその仕事を合理的にやろうとして、機械の発明を促進すること、の利益をあげている。

いずれにせよ、産業革命以降の工業社会はスミスの想像する方向で発展した。分業 (division) がさらに分業 (sub-division) を生み、さらにそれがいっそうの分業 (sub-sub-division) を生んで、今日の産業社会がなりたっている。分業とは労働の細分化のことに他ならず、労働の細分化をはかることによって、生産性の向上を図るということが現代の一大特徴となっているのである。

疎外と労働

しかし、労働の細分化は、同時に重要な問題を提起せざるをえない。アダム・スミスも指摘している疎外 (alienation) の問題である。この問題に関し、もっとも鋭く問題を提起したのは、カール・マルクスであった。かれは『経済学・哲学手稿』(一八四六)のなかで、この問題を

追求した。マルクスは、労働者がより多くの価値を創造すればするほど、それだけその労働者はますます無価値なもの、ますますつまらぬものになる、と労働者が労働生産物と引き離されて疎外されていくことを、そのようにのべている。

最近になって、自己疎外からの回復あるいは自己実現の問題がふたたび大きく強調されてきているのは、密度の高い細分化された労働による疎外の問題がそれだけ深刻になっているからである。

F・パッペンハイムは、著書『近代人の疎外』のなかで、ゴヤの『カプリーチョス』のなかの『歯を求めて』というエッチングを用いて疎外の問題を明快に例解している。

その銅版画は絞首刑になった男の歯には魔法の力があるという迷信にとりつかれた女が、わなからぶらさがっている死体へしのびよってるところを描いている。一片の布を手にもって死体から顔をそむけている女の気持ちは、恐怖と貴重な歯を手に入れようとする決意との間に引き裂かれている。つま先立ちで、腕をのばし、不意におそってくる恐怖におののきながら、女はこちこちになった死体の口へ手をさしのべているのである。

(中略)

かように現実を二つの部分に引き裂く人は、自分自身の自我においても分裂におちいる。ゴヤの銅版画のなかの女を引き裂いている裂け目は非常に深い。画家はこの女をたがいに引き離されている二人の間として、すなわち欲しくてたまらない目的物の方へ動いている一方の間として、自分自身の行動からみじめにも顔をそむけている他方の人間として、描いているように思われるくらいである。自分自身にとつて見知らぬ他人になってしまった人間の状態には何か不気味なものが

ある。しかし、それがわれわれの多くの者の生活を形づくる運命なのである。⁽⁷⁾

「自分自身にとって見知らぬ他人」になることを疎外という。フランツ・カフカの『変身』やアルベール・カミュ『異邦人』のような寓意小説に代表されるように、疎外は現代文学の主要なテーマである。また、チャーリー・チャプリンの映画『モダン・タイムズ』(一九三六)が、機械に従属し、時間に翻弄される労働者の姿を描いているのは、この問題がいかに多くの現代人の関心事であるかを示している。

現代人は、自由や平等を獲得し、封建制の身分制度や抑圧あるいは束縛から自由になったと思いついていた。ところが、新しい束縛あるいは抑圧が存在するのである。それはひとりひとりの個人が大きな「メガ・マシン」(巨大機械)の卑小な一員にしかすぎず、人間としての社会的有用性を失いがちであるという事実である。

カフカの寓意小説『変身』の主人公グレゴル・ザムザは、ある朝目覚めたら自分が大きな毒虫になっていくことに気づく。精励恪勤な外交販売員で、会社にも仕事にも忠実であるザムザにとって無断欠勤などありえない。その男が突如巨大な毒虫に変身し、会社に出勤できなくなってしまう。この男は食事もできなくなり、やがてやせ衰えて死んでしまう。この小説は、一義的に解釈することが不可能な寓意小説かも知れない。だが、疎外の含意がこめられていることも確かである。ザムザの変身物語は現代人に多くの示唆をあたえてくれる。現代の産業社会においては、ひとびとは分断され、コミュニケーションは崩壊し、自由な競争的秩序の下で、個人個人が最大限に対立させられている仕組になっている。各人はメリットクラシーの論理が暴力的に貫徹している社会に生きている。

個人の「原子化」(atomization)が進行し、D・リースマンがいう『孤独な群衆』(Lonely Crowd)の社会になっている。

ザムザは、セールスマンとして一定のノルマを果たしていないことを気に病んでいる。かれが毒虫に変身したのは、現実逃避であるためかも知れない。かれの無断欠勤(absenteeism)は消極的なサボタージュである。現代の産業社会は、多数のザムザを生んでいる。ひとりのザムザがいよいよといまいと関係なしに社会は動いていっている。ザムザの社会的有用性の喪失は明らかである。

フランス大革命の時代のド・ラ・メトリが「人体は自らゼンマイを巻く機械であり、永久運動の生きた見本である」⁽⁸⁾(杉捷夫訳)というように、人間は一種の機械であるが、社会もまた、大きな機械(「メガ・マシン」)である。メガ・マシンは、個々の人間の思惑をいっさい顧慮することなく、動いていく。古代のエジプトにおいては、奴隷たちが大量に動員されて巨大なピラミッドをつくるという苦役に従事した。現代の産業社会においては、巨大なメガ・マシンの管理・監視体系のなかに組み込まれて苦役に従事しているのである。アルベール・カミュの小説『シーシュポスの神話』は、現代産業社会での疎外された労働をギリシア神話に仮託しながら描いている。ギリシア神話のなかのシーシュポスは、神々の怒りにふれて、岩を山頂に運ぶという罰を科せられる。ところが、その岩は山頂に達するとその重みでふたたび山麓まで落下してしまう。したがって、シーシュポスの苦役は永遠に終わることはないのである。神々は、もっともおそろしい懲罰をシーシュポスに科した。この世で無益で希望のない労働ほどおそろしいものはないからである。

現代の労働者もこのシーシュポスと似ていて、無益で希望のない労働に従事している。そのように、この寓意小説は訴えているかのごとくで

ある。

大衆の登場

マルクスの没年でケインズやシュムペーターが生まれたと同じ一八八三年に、スペインでは輪転機の音をききながらオルテガ・イ・ガセットが生まれている。オルテガは、著書『大衆の反逆』（一九三〇）の冒頭で、つぎのようにのべている。

ことの善し悪しはともかく、今日のヨーロッパの社会生活において最も重要な一つの事実がある。それは、大衆が完全な社会的権力の座に上ったことである。大衆はその本質上、自分自身の存在を指導することもできなければ、また指導すべくもなく、いわんや社会を支配するなどおよびもつかないことである。したがってこの事実は、ヨーロッパが今や民族、国家、文化の直面しうる最大の危機に見舞われていることを意味している。⁽⁹⁾（桑名一博訳『大衆の反逆』、白水社『オルテガ著作集』2、一九九八）。

この書物の原書が上梓されたのは、一九三〇年のことであった。ヒトラーが政権を掌握する三年前のことである。そのヨーロッパ最大の危機は、やがてやってくるヒトラーの率いるナチスの擡頭と世界大戦となって現実化した。大衆の登場によるヨーロッパひいては世界の危機の時代が、オルテガによって予言されているのである。さらにつづけてつぎのようにいう。

こうした危機は、歴史上すでに一度ならず襲来しており、その様相や、それがひきおこす結果は周知のところ⁽¹⁰⁾で、その名称も知られている。つまりそれは、大衆の反逆と呼ばれている。⁽¹⁰⁾（前掲書）。

「大衆の反逆」(Rebelión de las Masas) が起きて以降「……大衆が法を無視して直接的に行動し、物質的な圧力によって自分たちの希望や好みを社会に強制している」と、オルテガはいうのである。そして、「われわれは現在、大衆の残酷な支配のもとに生きている。まさにそのとおりである⁽¹¹⁾」ともいう。

「大衆の反逆」が起きたのは、大衆民主主義、所得革命、人口の増大、社会保障の拡大、国家の変質などの複合的な原因にもとづくものである。人口が増大し、所得が平準化すれば、大衆の権利意識は高まり、かえって少数者を抑圧するようになる。「大衆はあらゆる非凡なもの、卓越したもの、個性的なもの、特別な才能をもったもの、選ばれたものをまきこんでいる。すべての人と同じでない者、すべての人と同じように考えない者は、締めだされる危険にさらされている……」という。

ナチスの登場は、『大衆の反逆』の典型例である。ナチスは、「……大衆の意志を一定の方向に向けさせるのには、大衆の注意を危険な敵に集中させるのが一番であることを知っており、それを宣伝の出発点にしていた⁽¹²⁾」(H・マウ、H・クラウスニック『ナチスの時代——ドイツ現代史』、内山敏訳、岩波書店、一九六一)。この宣伝戦略は、ナチスの基本戦略である。そしてこれは「すべての人と同じでない者、すべての人と同じように考えない者」を排除していく戦略である。

ヒトラーは、『わが闘争』のなかで、宣伝の基本をつぎのように記している。

宣伝の技術はまさしく、それが大衆の感情的観念界をつかんで、心理的に正しい形式で大衆の注意をひき、さらにその心の中にはいり込むことにある。

(中略)

大衆の受容能力は非常に限られており、理解力は小さいが、そのかわりに忘却力は大きい。この事実からすべて効果的な宣伝は、重点をうんと制限して、そしてこれをスローガンのように利用し、そのことばによって、目的としたものが最後の一人にまで思い浮かべることができるように継続的に行なわれなければならない。人々がこの原則を犠牲にして、あれもこれもとりいれようとするとすぐさま効果は散漫になる。というのは、大衆は提供された素材を消化することも、記憶しておくこともできないからである。(平野一郎、将積茂訳、新潮社、昭和四十八年)。

このようにヒトラーは、大衆の理解能力は、低いので重点を極度に制限すること、すなわち訴求内容を「集中させること」(concentration)と「繰り返しすること」(repetition)とが宣伝の要諦であるという。このような大衆蔑視の思想をもつヒトラーとナチスにドイツ国民は、なぜ支持をあたえたかが、つぎの課題である。

自由は苦痛である

その最大の理由は何か。政治学的、経済学的、心理学的あるいは文化的等々さまざまな理由が考えられるであろう。その回答のひとつは、『自由からの逃走』(Escape from Freedom)であるという、エーリッヒ・フロムの答えである。フロムのいう『自由からの逃走』とは、「かつての生活に意味と安定とをあたえていたすべての絆から解放されて、孤独となった」近代人が、「無力と不安に」たえられなくなった結果、「自由、消極的な自由から逃れよう」として、「新しい束縛」へかりたて

られることである。しかも、この「逃避はかれの失われた安定を回復することなく、ただ分裂した存在としての自我を忘れさせるだけである。かれはその個人的自我の完全性を犠牲にして、新しいはかない安定をみつける。かれは孤独にたえられないので、自我を失う道を選ぶ。このようにして、自由——からの自由——は新しい束縛へと導く」こととなる。

ここでいう新しい束縛とは、青年時代は「とるにたりない人間」「名もない人間」であるのみならずからみられているヒトラーの率いるナチズムの権力機構のことであり、魂の荷物預かり所(クローク)として、ドイツの民衆の多くは判断停止をしてナチズムに身をゆだねてしまったのである。

第一次的絆を失った民衆は、第二次的絆を求めようとする。このメカニズムは、服従と支配という形で現われる。服従という形で現われるのがマゾヒズム的(masochistic)な傾向である。これは、「劣等感、無力感、個人の無意味さの感情」から発している。マゾヒズム的傾向は、「……自分自身を小さくしようとしている、弱くしようとしている、そして事物を支配しないようにしている。たいていのばあい、かれらは外がわの力に、他のひとびとに、制度に、あるいは自然に、はつきりよりかかろうとしている。かれらは自分を肯定しようとせず、したいことをしようとしなない。しかし外がわの力の、現実的な、あるいは確実と考えられる秩序に服従しようとする。」⁽¹⁵⁾傾向である。

これに対し、サディズム的(sadistic)傾向には、たがいに関係があるが、三つのタイプがあると、フロムはいう。「第一には、他人を自己に依存させ、かれらに絶対的無制限な力をふるい、『陶工の手のなかの陶土』のように、かれらを完全に道具としてしまうものである。もう一

つは、他人を絶対的に支配しようとするだけではなく、かれらを搾取し、利用し、ぬすみ、はらわたをぬきとり、いわばたべられるものはすべてたべようとする衝動からなりたっている。……サディズム的傾向の第三のものは、他人を苦しめ、または苦しむのをみようとする願望である。⁽¹⁶⁾ フロムによると、「サディズムのおよびマゾヒズムの性質はすべてのひとびとにみいだされる。一方の極には、全人格がこのような性質で支配されているひとびとがあり、他方には、それらが支配的でないひとびとが⁽¹⁷⁾いる。」

フロムは、前者のサド・マゾヒズムの性格のことを「権威主義的性格」(authoritarian character)とよんでいる。「権威主義的性格」の人間は、「権威をたたえ、それに服従しようとする。」⁽¹⁸⁾しかし同時に「かれはみずから権威であろうと願ひ、他のものを服従させたい」と願っている。

また、ファッショ⁽¹⁹⁾的組織は、「権威が社会的政治的構造において支配的な役割を果たしている」という理由で、みずから権威主義的とよんでいるので、「権威主義的性格」ということばで、フロムは、ファッシズムの人間的基礎となるようなパースナリティの構造を代表させている。ヒトラーの『わが闘争』には、いたるところで大衆の権威主義的性格にかんする言説がみられる。特に宣伝に關しての言説が多い。たとえば、つぎのようにいう。

民衆の圧倒的多数は、冷静な熟慮よりもむしろ感情的な感じ⁽²⁰⁾で考へ方や行動を決めるといふ女性的素質を持ち、女性的な態度をとる。

また、つぎのようにも語る。

けれども宣伝は、鈍感な人々に間断なく興味ある変化を供給してや

ることではなく、確信させるため、しかも大衆に確信させるためのものである。しかしこれは、大衆の鈍重さのために、一つのことについて知識をもとうという気になるまでに、いつも一定の時間を要する。最も簡単な概念を何千回もくりかえすことだけが、けっきょく覚えさせることができるのである。⁽²¹⁾

われわれは、ヒトラーの以上の言説が今日のマーケティングの方法と酷似していることに気づくであろう。大衆社会の社会心理学的事実に基づ盤を⁽²²⁾おいているヒトラーの政治宣伝は、今日でも販売促進、選挙における大衆動員、カルト集団の信者獲得の方法にも生かされている。「宣伝は短く制限し、これをたえず繰り返すべきである。この堅忍不屈さが、世の中の多くのばあいがそうであるように、ここでも成功にいたる第一の、かつ最も重要な前提である。」⁽²²⁾というヒトラーの言説を忠実に実行しているのが、今日の政党であり企業等である。この言説がいまもなお有効なのは、現代社会が大衆社会であるからに他ならない。

政治宣伝は、短いフレーズを何回も何回も繰り返すことが重要なのである。販売促進の方法にAIDMAがある。AIDMAのAはattention、Iはinterest、Dはdesire、Mはmemory、Aはactionのそれぞれの略である。すなわち、注目をひき(A)、興味をもたせ(I)、欲望を起こさせ(D)、記憶させ(M)、行動させる(A)という五段階の順序で、商品を認知させ、購買させるまでのプロセスを説明した理論である。商品宣伝の方法とヒトラーの政治宣伝はきわめて類似している。プラットフォーム(政党の綱領)、マニフェスト(公約)あるいは候補者は、ひとつの商品である。この商品をいかにして認知させ、買わせるかの極意は、「短く制限し、これをたえず繰り返す」(concentration

and repetition) 宣伝を行なうことであり、ヒトラーはこの極意を徹底的に実践し、「被統治者の同意」(the consent of the governed) を獲得することに成功したのである。

「権威主義的性格」をもった大衆は、ナチスの政治宣伝に同調して「即興の民主主義」とよばれたワイマル体制に異を唱え、ナチスを選択した。それが一九三〇年代のドイツの状況であった。この頃、ドイツの社会民主党は、ナチス(Nazis)と共産党(Komms)を双生児のようにみなしていた。ところが、ナチスは、反共であり、それ故にドイツの財界の支持をえて、政権掌握に近づくことができたのである。

前述したように、フロムのいう「権威主義的性格」をもった指導者と指導を受ける者によって成立したのが、ナチス体制であった。それは「権威主義的性格」をもった一般大衆の『自由からの逃走』の結果であり、そのもてるエネルギーをナチス体制に譲渡した結果、成立したものである。この点に関してマイネッケは、『ドイツの悲劇』のなかでつぎのようにのべる。

ヒトラーの権力掌握をもたらしたものは、たしかにまったく特殊な、少なからず偶然的な諸原因の連鎖であった。われわれが示そうと試みたように、一般的な性質のどのような強制的必然性も、ヒトラーの任命書に自分の名前を書きこんだときのヒンデンブルグのペンを導きはしなかった。これにたいする防衛力は、そこにじゅうぶん存在していたはずである。もしヒンデンブルグがこれらの力を発揮させていたならば、たぶんヒトラー運動は、かつてのトーマス・ミュンツァーやミュンスターの再洗礼派の王国のように、一つのエピソッドとしてとどまったことであろう。ヒトラー運動の普遍的将来もまた、それと同時に⁽²³⁾にかたづけられたことであろう。

しかし、マイネッケのいうように、ヒトラーの登場は、けっしてまったく特殊でもなければ偶然的な諸要因によるものではなく、いつでも起こりうるところに問題があるのである。「ボヘミアの伍長」とヒトラーを内心では軽蔑していたという軍人大統領ヒンデンブルグが、最終的にはヒトラーに屈してブリュニングを罷免しヒトラーを任命することを決意してしまったことは重要である。ヒトラーは、みずから望んだ『ステイタス・シーカー』(地位を求め人)ではなかったといわれている。村瀬興雄は、『アドルフ・ヒトラー』のなかでつぎのようにいう。

ヒトラーは権力亡者として、術策をつくして政治運動の階段をのぼりつめた人物ではない。周囲に押しあげられて、いわば自然の形で権力をにぎったのであって、彼自身の才能と努力のほかに、彼をめぐる政治・社会・文化の状況が彼の成功と彼の運動の発展を規定したのである。⁽²⁴⁾

ヒトラーとナチズムは、歴史的に一回限りの特殊の現象ではない。いつでも、どこでも起こりうる現象であることを忘れてはならない。大衆社会が存在し、ポピュリズムがあるかぎりヒトラー的な全体主義は、やってくるのである。

権威主義的性格

ダニエル・ベルは、『二十世紀文化の散歩道』のなかで、カール・マルクスの史的唯物論やウィルフレッド・パレットのエリート周流論のような一元的な見方で社会変動あるいは歴史を分析することの狭隘さを批判している。⁽²⁵⁾ベルによると、社会変動を把握するには、政治の領域、経

済・技術の領域、および文化の領域の三つの領域から把握することが必要である、とのべている。この三つの領域から分析することを、ベルは軸原理 (axis principles) による分析とよんでいる。政治の領域での原理は均等性 (equality) 経済・技術の領域での原理は効率性 (efficiency) 文化の領域では自己実現 (self-actualization or self-realization) あるいは自己満足 (self-gratification) である。

政治の側面では、普通選挙権の拡大にみられるように、一部の特権階層だけに許されていた選挙権がある一定の年齢に達すれば所得、性、門地等に関係なくあたえられるように、均等性の方向に動いている。その結果、大衆民主主義 (mass democracy) の時代が到来した。選挙が人気投票となりがちなのは、大衆民主主義のためである。ヒトラーは、大衆民主主義の基盤の上に立ってみずからの政治運動を開始したのである。その大衆とは、「……よしと考えるままに、行為し、考えることをさまざまげる外的な束縛から自由になった」けれども、「……自分が欲し、考え、感ずること」ができないので、「……匿名の権威に協調し、自分のものではない自己をとりいれる」こととなる。このようなことをすればするほど、「……無力を感じ、ますます同調するように強いられる」ようになる。そこで、「……興奮を約束し、個人の生活に意味と秩序とを確実にあたえると思われる政治機構やシンボルが提供されるならば、どんなイデオロギーや指導者でも喜んで受け入れようとする危険」が存在するのである。

ラスウェルによると、政治とは財貨 (goods)、暴力 (violence)、シンボル (symbol) を操作して行なうものである。ヒトラーとナチスは、とくに暴力とシンボルを巧妙に行使して、権力を掌握し行使した。ヒトラーとナチズムの行なった政治運動は、政治の教科書通りの大衆社会で

の政治指導であった。とくにナチ運動の中核である下層中産階級は、「……興奮を約束し、個人の生活に意味と秩序とを確実にあたえると思われる政治機構とシンボル」にもっとも弱い層であったから、その層を土台にして勢力を拡大していった。

疑似革命家

G・W・F・ハルガルテンは、著書『独裁者』のなかで、イタリアのムッソリーニやヒトラーのような独裁者のことを「疑似革命的」といって、つぎのようにのべている。

或る一定の意味では、ファシスト型の独裁者も、彼らよりずっと古くから存在しており、類似の条件のもとでは今後もいつでも存在する、或る種の実力者の二〇世紀版に過ぎない。この理由から、また、ファシスタとナチスとを区別している際立った差異を考えて、われわれは普通この類型一般を指して「疑似革命的」と呼ぶことにするが、この言葉は、ファシストの宣伝が大変な努力をしてはぐらかさそうとした、この型の主要な特色の一つを強調してもいるのである。

しかも、疑似革命の指導者たちは、マルクスの分類に従うのならレンペン・プロレタリアートに属する人々であったのである。前の文章に続いてつぎのようにいう。

疑似革命の指導者は、彼が政権に達した際の全般的状況のせいで、そもそも初めは極めて奇妙な立場にあった。彼は社会の底辺から出た男で、労働者にさえ怪しまれていたのであって、初めは軍事力や名声はおろか大衆の支持さえ持っていなかった。独立した指導者としての生涯の初期においては、背教の社会主義者ムッソリーニも、これと言

った職とてない落伍したけちな策動家ヒトラーも、政治的には無であり、いかなる重要性も持ち合わせていなかったのである。⁽³¹⁾

ヒトラー自身も「ただの庶民」ということばを頻繁にもちいているように、疑似革命の指導者たちはフェーラーもドゥーチエも「群衆のなかの一つの顔」にすぎなかった。しかも、かれらは、落伍者であり、社会の底辺でうずくまっていた人々であった。そのかれらが「カリスマ指導者」の地位を獲得し、社会を指導することとなったのである。最初は「救世主」として、やがてはマキヤベリズムの権化の「超人」としてあるいは悪魔として、国家に君臨することとなる。ハルガルテンは、ヴァーグナーの「神々の黄昏」を愛好するヒトラーと、ムッソリーニ、そしてヴァーグナーの三人の共通の経験に触れてつぎのようにいっている。苦痛に満ちたパリ亡命の年月、ウィーンの木賃宿での窮状、スイスにおける希望のない浮浪生活、それがヴァーグナー、ヒトラーそしてムッソリーニをして不幸から「救済」してくれる超越的な力を熱望させたのである。⁽³²⁾

「超越的な力」を熱望したのは、ヒトラーやムッソリーニばかりではなかった。多くの一般大衆もそれを求め支持したのである。人生に大いなるルサンチマンをもつ人々によって、大衆が組織され、その頂点にたったのがヒトラーやムッソリーニであった。ヒトラーやムッソリーニに期待する前に「救済」してくれる「超越的な力」として期待されていたのが、マルクス主義者であった。その期待にマルクス主義者たちはいっさい応えることができなかった。このことに関し、ウィーン出身のP・F・ドラッカーは、『「経済人」の終わり』（一九三九年）のなかで、つ

ぎのように語る。

ファシズムは、ヨーロッパの精神的、社会的秩序の崩壊によって生まれた。この秩序崩壊にとどめを刺したのが、資本主義を葬り、新しい秩序をもたらすはずだったマルクス主義に対する信条の崩壊だった。⁽³³⁾ それでは、なぜマルクス主義に対する信条が崩壊したのか。ドラッカーは、こういう。

マルクス主義の成功は、自由と平等のない資本主義に打ち勝ち、階級のない社会を実現できるかどうかにかかっていた。そして、まさにマルクス主義は、階級のない社会を実現できず、それどころか自由のない硬直的な階級をもたらさざるをえなかったがゆえに教義としての力を失った。⁽³⁴⁾

そして、ドイツのナチズムについて、前述の書物の一九六九年版への序文のなかで、ドラッカーはつぎのように語っている。

私は、マルクス主義のいう「不可避の革命」が実際には起こらないであろうことを認識するとともに、逆に、当時の全体主義、とくにドイツのナチズムが、たんなる経済体制の革命を超えたはるかに根源的なもの、すなわち、価値観、信仰、道徳の転覆さえ目指す本当の革命であることを認識した。事実それは、希望を絶望に変え、理性を魔術に変え、信仰を恐怖にかられ血に飢えた狂乱の暴力に変える革命だった。⁽³⁵⁾

一九一七年のロシア革命は、階級のない社会をつくる試みとして、ヨーロッパの一部のインテリゲンツィアには、大いに歓迎された。それが

間もなくのクロンシュタットの乱（一九二一）に対する鎮圧、そしてスターリン体制の成立以降の大量粛清によって、絶望にかわっていたのである。このマルクス主義への幻滅そして「裏切られた革命」が、全体主義を誘導する誘い水になったことは、容易に想像できることである。しかも、共産主義者たちは、社会民主党は社会ファシズムであるとして、敵はナチスではなく社会民主党であるとみなしていたのである。ドイツの政治学者カール・シュミットは、政治の要諦は友敵関係を峻別することにある、とのべている。この点、コミンテルンから派遣されていたマヌイルスキーもドイツ共産党のレンメレも、一九三〇年代当初、友敵関係を峻別できなかったことでは同じであった。かれらにとって敵は社会民主党であって、ナチスではなかったのである。このことが疑似革命家に政権を掌握されてしまった最大の原因となった。マヌイルスキーは、スターリンの片腕といわれていた人物であるので、スターリンも同様の見解をもっていたと想像される。

したがって、コミンテルンもまた、「希望を絶望に変え、理性を魔術に変え、信仰を恐怖にかられ血に飢えた狂乱の暴力に変える革命」の本質を明確には理解できなかった。一九三六年に勃発したスペイン市民戦争においても、フランコ派（王党派）に対する戦いよりも、人民戦線内部の対立のほうに相当のエネルギーが割かれたことが、国際旅団に参加した知識人の報告の多くにある。人民戦線側が友敵関係を判別できなかったことが、フランコ派の勝利を導いたのである。

大衆社会の政治学

スペイン市民戦争に参加し九死に一生を得たジョージ・オーウェルは、生涯を通して全体主義に反対し、スターリン主義批判の『動物農園』

（一九四五）や、『一九八四年』（一九四九）を著わしたことはよく知られている。そのオーウェルが、全体主義者ヒトラーの『わが闘争』の書評を書いている（一九四〇年）。そのなかで、オーウェルは、ヒトラーを嫌いはなれなかったとして、つぎのようにのべている。

わたしは、自分が一度もヒトラーを嫌いになれなかったことを、はっきり言っておきたい。……わたしは、もし手の届くところまで近づければぜったいに彼を殺すだろうが、それでも個人的な敵意を抱くことはできまいと考えてきた。つまり彼にはどこかふかく人の心を動かすところがあって、それは写真を見てもわかるのである。⁽³⁶⁾

その写真についても、かれはつぎのようにいう。

やや男らしいところはあるものの、無数にある十字架上のキリストの絵の表情にそっくりなのだ。……かれは殉教者であり、犠牲者なのだ。岩につながれたプロメテウスであり、徒手空拳で自己をかえりみず耐えがたい不正と闘う英雄なのである。⁽³⁷⁾

これは間違いなく、あのオーウェルの発言なのである。さらには、極め付きのように、つぎのような発言をしているのである。

社会主義ばかりか資本主義のばあいにも、これはしぶしぶながらにせよ、国民に向かって「諸君に幸せを約束する」と言っているのに対して、ヒトラーは「諸君には闘いと危険と死を約束する」と言う。そしてその結果は、全国民が彼の足下に身を投げ出すのである。⁽³⁸⁾

全体主義を憎んだオーウェルが、ヒトラーを「一度も嫌になれなかった」というのはなぜか、人は大いに疑問とするところであろう。オー

ウェルは、こういう。

……ヒトラーには快樂主義的人生觀の誤りがよくわかっている。前大戦以来、ほとんどの西欧思想、というより「進歩的」思想にいたっては、そのすべてが、人間は安樂と安全と苦痛をのがれる以上のことは望まないと、暗黙のうちにきめてかかっている。……ヒトラーは樂しみを知らない人間だけに……人間が欲しがるものはかならずしも安樂、安全、労働時間の短さ、衛生、産児制限、また一般的に言って常識といったものばかりではない、ということも、わかるのである。³⁹⁾

ヒトラーとナチスの運動が、多くの大衆に支持され、一時的とはいえ、巨大な『ビヒモス』(ノイマン)をつくりあげること成功したのは、安樂、安全、労働時間の短縮などの日常的な幸福を求めることだけが、大衆の欲求ではなく、ときには危険な賭けのようなことも要求することがあることを、ヒトラーは知っていたからである、とオーウェルは語る。精神分析の創始者はヒトラーと同国人であるフロイトである。その深層心理学の応用である深層心理学の政治学をヒトラーは、本能的に感じ取っていたのである。それが前述の權威主義的性格をもった大衆社会における統治者と被統治者との関係であり、マス・マニピュレーション(大衆操作)の方法の実践である。ヒトラーを精神病患者であるとか、ナチスの幹部は異常性格者が多いとかの議論からヒトラーやナチスを分析することは容易である。だが、それだけではおそらく何も解明できない。それ以上に重要なのは、大衆社会の深層心理学を解析することである。このことは、オーウェルの議論をみても明らかであろう。

『一九八四年』の世界

ジョージ・オーウェルが、本名のエリック・ブリア(Arthur Blair)としてビルマの警察官として勤務した経験から『絞首刑』(一九三二)や『象を撃つ』(一九三六)を書いたことは、よく知られている。これらの作品には、帝国主義の宗主国の官吏でありながら植民地人に対する同情をもちつつも、同時に植民地人に対する輕侮の念があることが表明されている。このアンビヴァレントな感情がヒトラーにも向けられていることは、前述の書評をもって知ることができるであろう。そばに寄ってくれば、殺すであろうというつよい反感をもちつつも、かれは「一度も嫌いにはなれなかった」と堂々告白するのである。

そのジョージ・オーウェルによって書かれた小説が『一九八四年』である。この小説は一九四八年に完成し、翌四九年に刊行されたもので、完成された年を裏返しにして『一九八四年』という題がつけられたという。現代的な言い方でいえば、情報操作や思想警察によって監視・統制される『テクノポリス』(科学技術によって支配される独裁的な国家社会)の到来を描いたものである。当時は未来小説と評されたが、そこにでてくる情報機器やシステムは、今日ほとんど存在している。市民一人一人の一挙手一投足がテレスクリーンとよばれる情報機器によって監視されている独裁者の支配する『一九八四年』の社会は、技術的にはすでに可能となっている。その独裁者は「偉大な兄弟」(Big Brother)とよばれる。今日、自由を抑圧したり真理を歪曲したりする独裁者の支配する社会を「オーウェルの世界」(Orwellian World)とよぶことがあるのは、このアンチ・ユートピア小説の影響力の大きさを物語っている。

この小説のように、「オーウェルの世界」は、その時代時代の科学技術を用いて、人民を支配する社会である。いままでにも存在したし、こ

れからも存在する。ヒトラーの時代には、映画やラジオやページェントであった。それが電子技術にかわっているだけで、他はかわるところがない。科学技術が高度化すればするほど、ソフトな支配体系が容易に完成することとなる。問題はフロムが指摘した「権威主義的性格」である。とくに大衆の間に「道徳的マゾヒズム」が存在することである。「道徳的マゾヒズム」というのは、フロムによると、「精神的に傷つけられ、卑しめられ、支配されることを求める」心情で、「通常このような願望は意識的ではないが、それは、忠誠、愛、或は自己否定、又自然の法則や運命や人間を超えた他の力などへの応答として、理屈づけられる」という。

現代の日本の課題

戦後、日本は経済の高度成長によって「豊かな社会」あるいは「高度大量消費時代」の段階に達し、人々の生活は物質的には一応豊かになった。だが、日本の社会は依然として封建遺制がいたるところに残存している、精神的にはけっして近代化されているとはいえない。急激に都市化した場所では、いまなお、かつての地主（親作）と小作の関係が残存しているのである。近代組織の最前線にある企業でさえ、親分・子分の関係で人事が左右されたりすることが、ジャーナリズムの話題になることがある。いじめに象徴されるように、日本はいまだに個人主義に基調をおく社会ではなく、集団主義的な国家であることを否定することはできない。日本の精神風土は、いまだに封建的である。日本のあらゆる組織のあらゆる会議においてみられる風景は、権力者の顔色をうかがったりあるいは大勢の方向をみて意思を決定している。大勢から逸脱することを、多くの人はおそれているのである。

フロムがいう「道徳的マゾヒズム」は、近代になっても多くの日本人の大衆の習性となっている。明治維新が、絶対主義政権の成立と考えるか、あるいは不徹底ながら一種のブルジョワ革命とみるのかは、いままなお決着していない問題である。あるいは以上の労農派や講座派とは別の第三の見方も可能であるかも知れない。

明治維新と同様、戦後日本の民主化も「上からの改革」であった。民主主義が定着するには、「下からの改革」が必要である。日本は、明治以降の改革が「下からの改革」ではなく、「上からの改革」であったため、多くの封建遺制をのこしながら、その解消の努力をせずに表層上の民主主義国家あるいは表層上の近代市民社会のまま、今日にいたっている。私立大学の教員ですらみずからを教官とあって、少しも不思議がらないのは、「官尊民卑」の奴隷根性が抜けきっていないことを示している。これも封建遺制が残っている証左である。

そのような精神風土の上に、科学技術の発達によって国民を監視したり統制したりする仕組、前述した「オーウェルの世界」が科学的に完成しているので、いっそう効果的な監視・管理・統制などの方法が容易になり、「ソフトな支配体系」ができあがっている。

「オーウェルの世界」は、ひとびとを「電子監獄」(electronic prison)に閉じ込めておく社会である。わたくしが「ソフトな支配体系」というのは、「電子監獄」に閉じ込めて、政治操作をする独裁的な政治社会システムのことである。現代日本は、そのような社会にすでにはいっている。わたくしは、このような社会を近代奴隷制社会とよんでもよいと思う。近代の奴隷は、ある程度の所得をうることができ、自由に振る舞っているようにみえる。自動車に乗り、携帯電話をかけ、レジャーを享受している。自由に契約を結び、みずからの努力によって、自

已実現が可能な社会になっている。どこが奴隷なのか、との疑問も出てくるであろう。

しかし、みずからの意見を持てずあるいは表明せず大勢に同調し、「自動機械」(オートマトン)のように振る舞い、自己決定権をみずから放棄し、他者に権利を全権委任するだけであるならば、その人は到底自由な人間とはいふことができない。そのような人を奴隷とよぶ。奴隷の大きな特徴は、何事も「曖昧主義」(Obscurantism)で「事なかれ主義」で「大勢順応主義」であり、意思を明確にしないことが生きる智慧であると信じ、行動することである。

戦後、日本はさまざまな民主化政策によって、表層上は自由で民主的な社会になった。また、経済の高度成長によって文明の利器を手にすることができ、人間の身体を拡張する機器を用いて、快適な生活を営むことができるようにはなった。われわれは、その快適な生活の代償として自由や人間の尊厳を失っているのではないだろうか。

ヘーゲルは『法の哲学』において、近代市民社会が「欲求の体系」であると、のべている。この「欲求の体系」とは、「個々人の労働によって、また他のすべての人々の労働と欲求の満足とによって、欲求を媒介し、個々人を満足させること」⁽⁴⁾の体系である。「欲求の体系」は、換言すれば近代資本主義社会のことでもある。資本主義あるいは市場経済は、欲求を達成するには、もっとも効率的な仕組であることを証明した。ファシズムあるいは一般的には全体主義は、大衆社会が「欲求の体系」であることをもっとも熟知している政治体制である。

最近の科学技術の発達は、現代人にとって新しい魔術となっている。特にオピニオン・テクノロジーの発達は著しく、ひとびとの選挙の投票行動がこの種の活動によって動かされている。ヒトラーも「劇場国家」

の演出者であった。かれを狂人とかオカルティストであるとして解釈してもファシズムやナチズムの説明はできない。支配者の側からだけではなく、被支配者との相互関係を明確にして始めて全体主義の機能と構造が理解できるのである。その根底にあるものは、ヒトラーについてオーウェルがのべていることである。国民に幸福を約束することによってではなく、受難を約束して、政権を掌握していったという指摘である。近代市民社会は、合理主義と進歩の思想を最高の価値であるとして、信仰の対象となつてさえていた。しかし、ヒトラーは、どんな思想にも飽和点があり、転換点があることを体験的に理解していた。大衆の行動は、非合理主義的で退歩的であることあるいはそのような行動をも好むことを知っていた。一九六八年の五月革命の際、フランスの学生は、「デカルトを殺せ！」のスローガンをキャンパスの壁に大書した。誤解をおそれずいえば、このような思想をヒトラーもまた、もっていたと思われるのである。デカルトで代表される合理主義とそれが招来した官僚的な産業社会に対する反感は、ヒトラーもまた、有していたからである。全体主義に反対するには、オブスキュランティズムからの脱却と意見を堂々と言い合うデイベートが活発であることが重要である。自由から逃走することをやめ、積極的な自由を追求することが重要である。そのことに成功しないかぎり、日本は、いまだに奴隷制社会である、といつてもいいであろう。「無責任体系」は統治者の側にあるばかりではなく、被統治者の側にもあることを自覚すべきである。その自覚がない限り、物質的にはゆたかな生活を享受しつつも、精神的には自己決定権を放棄した大勢順応の奴隷の社会であり、日本はまだ「夜明け前」の状態にあるといつてもよい。凍として民主主義を築くための意識革命が緊急に必要である。そうでないならば「隷従への道」を歩むほかはない。

注

- (1) テンニエス『ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ——純粹社会学の基本概念』(上)、杉之原寿一訳、岩波書店、昭和三十二年。
- (2) コンドルセ『人間精神進歩史』(第一部)、渡辺誠訳、岩波書店、昭和二十六年。
- (3) 同右。
- (4) 同右。
- (5) 小松芳喬『産業革命史』(再訂版)、一條書店、昭和三十二年。
- (6) A・トフラー『第三の波』、徳岡孝夫監訳、中央公論社、昭和五十七年。
- (7) F・パッペンハイム『近代人の疎外』、栗田賢三訳、岩波書店、一九六〇年。
- (8) ド・ラ・メトリ『人間機械論』、杉捷夫訳、岩波書店、昭和三十二年。
- (9) オルテガ『大衆の反逆』(『オルテガ著作集』2)、桑名一博訳、白水社、一九九八年。
- (10) 同右。
- (11) 同右。
- (12) H・マウ、H・クラウスニック『ナチスの時代——ドイツ現代史』、内山敏訳、岩波書店、一九六一年。
- (13) ヒトラー『わが闘争』、平野一郎・摺積茂訳、新潮社、昭和四十八年。
- (14) エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』、日高六郎訳、東京創元社、昭和二十六年。
- (15) 同右。
- (16) 同右。
- (17) 同右。
- (18) 同右。
- (19) 同右。
- (20) 前掲『わが闘争』。
- (21) 同右。
- (22) 同右。
- (23) マイネッケ『ドイツの悲劇』、矢田俊隆訳、中央公論社、昭和四十九年。
- (24) 村瀬興雄『アドルフ・ヒトラー——「独裁者」出現の背景』、中央公論社、昭和五十二年。
- (25) ダニエル・ベル『二十世紀文化の散歩道』、正慶孝訳、ダイヤモンド社、一九九〇年。
- (26) 前掲『自由からの逃走』。
- (27) 同右。
- (28) G・W・F・ハルガルテン『独裁者』、西川正雄訳、岩波書店、昭和四十二年。
- (29) 同右。
- (30) 同右。
- (31) 同右。
- (32) 同右。
- (33) P・F・ドラッカー『経済人』の終わり——全体主義はなぜ生まれたか』、上田惇生訳、ダイヤモンド社、一九九七年。
- (34) 同右。
- (35) 同右。
- (36) オーウェル『オーウェル評論集』、小野寺健編訳、岩波書店、一九八二年。
- (37) 同右。
- (38) 同右。
- (39) 同右。
- (40) 前掲『自由からの逃走』。
- (41) ヘーゲル『法の哲学』(中公パックス「世界の名著」44『ヘーゲル』)、岩崎武雄訳、中央公論社、昭和五十三年。